# とよなか ふれあい

■シルバーだより■

第20号
1995年1月1日
発行

社団法人
豊中市シルバー人材センター
豊中市中桜塚3丁目3番1号
TEL 856－1777

# 新春のごあいさつ

## 年頭に当たって

理事長　三河　寛治

新年あけましておめでとうございます。

会員の皆様方には、ご健康で新春をお迎えのことと、心からお慶び申し上げます。

旧年中は、当センターの事業運営に格段のご支援、ご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

私、昨年五月片山喜之氏の後を受けて豊中市シルバー人材センターの理事長をお引き受けすることになり、初めて新春のご挨拶を申し上げるに当たり身の引き締まる想いが致しております。

昭和五十六年六月誕生以来ほぼ順調に契約金額を伸ばして参りました当シルバー人材センターにも、バブル崩壊後の経済不況の波が若干遅れて押し寄せてまいりました。

最近回復の兆しが見え始めたと申しますが未だに好転はしておらず、平成六年度の決算見込みでも前年度より約一割程度ダウンすると予想を致しております。

さて、昨年の十二月から、化粧なおしをした豊中市役所北別館の一階に事務所を移し事業を継続することができましたのも市長さんを始め関係部局の方々のご理解とご協力のたまものだとわれわれ一同感謝致しているところでございます。

これを機会に初心にかえり元東京大学総長で初代社団法人全国シルバー人材センター協議会会長の故大河内一男先生が提唱された基本理念、則ち自発性、自主性をもち社会との相互交流・連携を忘れず、公益性、公共性を十分自覚し、私をはじめ役職員一同は、この理念実現に向けて微力ながら精一杯努力をして参りたいと存じます。

どうか、会員の皆様におかれましても、「自主・自立」「共働・共助」の精神で当シルバー発展のためご支援とご協力をたまわりますようお願い申し上げます。

最後になりましたがこれからの一年もご健康で幸福な年でありますようお祈り申し上げまして私の新年のご挨拶といたします。

## 新春をむかえて

豊中市長　林　實

明けましておめでとうございます。

社団法人豊中市シルバー人材センターの会員の皆様にはお健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

平素は、市政の各般にわたり多大のご支援・ご協力を賜り心より厚くお礼を申し上げます。

貴センターは、当初、会員一三八名から出発されましたが、いまや一二〇〇名を越えられ、年々、順調に発展してこられました。今では市民にとってなくてはならない存在になったと申しましても過言ではないと存じます。

これは会員の方々が今日まで培われてこられました知識と経験を大いに生かし、誠実に就業してこられた結果の賜ものだと感謝いたしております。今後ともいつまでもご健康に留意され、豊中市の発展にお力添えをいただきますようお願いいたします。

昨年末には、シルバー人材センターの事務所が、北桜塚2丁目から中桜塚3丁目の豊中市役所北別館の一階に移転され、今後ますますセンター事業が発展していく拠点として大いに期待しています。

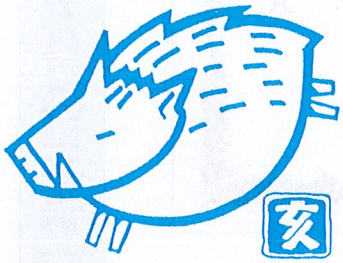
さてバブル崩壊がいまだに大きく尾をひき、難問が山積している状況のもと、市長として二期目を担当させていただく初めての新春を厳粛な気持ちで迎えています。

今後とも高齢者に対する福祉行政につきましては、あらゆる努力を傾注してまいりますとともに、快適で、利便性・文化性豊かな、ゆとりと豊かさを実感できる、活力と魅力にあふれた「いきいき豊中」の実現を目指してまいりたいと存じます。

どうか皆様方の変わらぬご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、豊中市シルバー人材センターのますますのご発展と会員の皆様方のご健康とご活躍をご祈念申し上げまして、新年のご挨拶といたします。

# あけまして おめでとう ございます




## 役員

理事長　三河寛治
副理事長　宮﨑英三郎
顧問　酒井千秋
顧問　片山喜之
常務理事　安井五郎
理事　山路政市
理事　正源義一
理事　黒岩秀子
理事　小川晋一
理事　織田照子
理事　林泰野
理事　藤田恭通
理事　佐々木信也
理事　上田善治
理事　吉川武二郎
理事　宇都宮義典
理事　阿南和男
理事　福田勝啓
理事　中原俊彦
監事　藤井健二
監事　藤本哲夫
事務局職員一同

今年も皆様のお宅をご訪問させていただきます。

### 地域班役員

**第一班**
※西田秀雄
河嶋勝
橋本勘治郎
金川三郎

**第二班**
※渋谷常三郎
大森一男
吉川武二郎
青木富雄

**第三班**
※浦欣也
松原学
久保田常豊
北山正廣
内藤倫吉
橋村信一

**第四班**
※里忠夫
徳永美恵子
宮木宗紀
住田茂子

**第五班**
※小原仲次郎
加藤英俊
田中ムツ子
中島瑞津江

**第六班**
※川田政信
石田芳美
宇都宮義典
森田つや子

**第七班**
※穂崎政治郎
幸田朋和

**第八班**
※津田正平
桧垣一郎
辻朝治
松下康子

**第九班**
※野口高茂
岩村隆正

**第十班**
※宮﨑三雄
山田信夫

**第十一班**
※小西章一
古市恒義

**第十二班**
※阿南和男
中内恢三
藤岡与五郎
廣瀬紀
中井艶子
山路政市
佐々木信也
山﨑太美夫
岡本宗五男

**第十四班**
※原田幸治
中春雄

**第十五班**
※前田正博
田中政男
前川政幸

**第十六班**
※正源義一
織田照子

**第十七班**
※中塚学
竹中由造

**第十八班**
※金子勝蔵
撫養定文

※は地域委員
その他は地域世話人

# 「会員の主張」第一席に入選

賞
第一席
岡本宗五男殿
あなたが応募された「シルバー人材センター事業に関する会員の主張」は頭書の成績をおさめられましたよってここに表彰します
平成六年十月二十日
社団法人全国シルバー人材センター協会
会長　関　英夫

当シルバー会員
岡本　宗五男 氏
（ふれあい編集委員）

全国の選考で見事第一席（2名）に入選されました。また本誌にも前号より「コラム」を執筆されています。

## 日本の高齢化社会に向けて シルバー・コンサルティング 業務の展開を提案する

高齢化社会の真っ只中にあって㈳シルバー人材センターでは活力ある地域社会づくりに鋭意取り組み、種種施策を推進されておられることに対し、敬意を表するものであります。

### 〔提案の背景〕

さて、不況がつづき、一般の雇用事情が厳しくなってまいりますと、高齢者に対する雇用の機会がますます減少し働く機会を狭められて行く昨今、事務系等未就業会員への就業機会提供には並々ならぬご苦労があろうかと存じます。

これまで、就業を求められてきた作業内容も、庭仕事、大工仕事、警備業務、乗務員運転手等、手に職を持った方々の就業が主流を占めていたのではないでしょうか。そこで、事務系の会員各位の就業の機会を創造するためにも、この際次の提案をしたいと思います。

### 〔アドバイザリー・グループの結成〕

則ち、会員の方々の中には、現役時代に第一線で会社経営・商店経営、労務管理・工場管理、財務管理、会計・経理、貿易実務、翻訳・通訳、建築設計、印刷出版、編集業務、広告・宣伝、イラスト・デザイン、マスコミ・メディア、電気通信・コンピューター関連等の分野で活躍されていた専門職や技術者が少なからずおられる筈です。このような方々の才能、技能を有効に活用するため、この際あらためて登録し直して頂き、積極的にその存在をP・Rし、仕事を発掘する業務を展開してはどうかと思います。

つまり、そう言った会員の方々を主体としたアドバイザリー・グループを結成し、所謂、コンサルティング業務を展開してはどうかと考えます。そこには、登録会員の中から専門分野別に各種業務に適した人材を配し、外部からの専門的な問い合わせや、相談、依頼事項に対応したサービスを提供することができます。

## 〔自主的な就業促進部会の設置〕

さらに、この業務を有効に機能せしめるために、会員組織の中に就業推進部会と言ったものを設け、先のブレイン集団と連携し、職域を開拓する仕事も、センター事務局のご協力の下に会員の自主的活動を主体として、積極的に可能性のありそうな相手企業や団体、個人にアプローチすることが可能となります。

## 〔本プロジェクトの意義〕

事務系の高齢者と同じように、現場で活躍された方々もあらゆる分野で活躍されていた人達ばかりでしょうから、現場で役立つ技術のみならず、過去の豊かな経験と知識を持ち、それらを有効に役立てたいと願っておられる方も少なくないと思われます。そう言った方々の才能を埋もらせておいてよい筈がありません。特に、人口増加率が下がり、六十五歳以上の人口が二〇二五年には二十五%に達すると見込まれている現在、ただ単に、座して待つと言った形で、与えられる就業の機会を選択しているだけではいけないのではないかと思います。

かく、シルバー・エイジの優秀な人材を組織化しておくことは、今後の高齢化社会にとって有益であるのみならず、高齢者の方々に勇気と希望をあたえるものになろうかと思います。シルバー人材センターがモットーに掲げている「自主・自立」「共働・共助」の精神にも適うのではないでしょうか。

未だ具体的な構想が固まっている訳ではありませんが、優秀な頭脳集団を組織化し、自主的な業務活動を展開していくことによって、会員組織の拡大充実、センター事業の普及啓発、しいては、会員の加入促進等センターの目的達成の一助となり、センターの発展につながるものと信じます。

何卒、会員諸兄の総意と熱意によって、このプロジェクトが実現されます事を希求し、本提案をする次第です。

# 年齢

十一班　横山　功一

もう
あこがいナ
七十一にもなると。
なア
わしも七十一やテ。
湖北の義兄は江州訛り丸出しで言う。
教員生活一筋だった。
五十代でも通りますよ。
半分は本音である。
そんなこと　あろかいナ。
義兄は哄笑した。
笑うと
顔じゅうに年齢が広がる。

在職中
訪ねてきたOBは
決まって年齢を話題にした。
―― 茫漠たる寂寥の風が吹いていたのだ
その頃
ぼくは未だ若く
そういうことに気も付かなかった。
存在感が年齢とは ――
年齢は背後から吹きつける風だ。
弾(はじ)き出そうとする風だ。

この先
せめて口にすまい
年齢を。
―― ぼくも六十四になった

# 会員のひろば

（順不同）

## 毎日を感謝！ 脳梗塞から立ち直って

三班　板倉　工

入会させていただき、充実した毎日を送っています。

三十五年間勤めた会社も退職してホッとした平成四年の八月十九日のことです。

夜中の三時頃に、ふとんから起き上がろうとしたが、足がふらふらとして立てない。それでも私は負けるものかと、階段から落ちそうになりながらも、頑張って階下へ降りた。降りることはできたものの、トイレの前でとうとうひっくり返ってしまった。寝ている家中のものを起こして、病院へと向かいました。

診断の結果、脳梗塞でした。みるみるうちに、左半身が麻痺してしまった。もう人生も終わりかと思い失望をしたことも…。なにもかもが、いやになったのです。でも、昼は家内が朝早くから夕方まで、私の身の廻りの世話をしてくれた。夜になると、右手に届くのは、リバビリの為にベッドに付けてあるさらしの紐。私は、その紐で死ぬことも考えた。けれども、一生懸命通ってくれる家族のことを考え、またもう一つ心に灯をともしてくれることがあり、生命力が湧いてきたのです。

それは、自宅の近くにある借農園の畑でした。早く帰って大根の種を蒔かなくてはとか、白菜の種を蒔かなくてはと、気になり始めたのです。このことを聞いて、娘夫婦が畑仕事など全く判らないながら、私の想いを受けてくれた。

近所の人が見舞いに来てくれ、「畑のことは安心しなはれ。息子さん達が耕して種を蒔いて、守ってくれているから」と教えてくれた。それを聞いて、私は嬉しくなり安心したのです。ますます早く家に帰りたいと思い、早く退院できるようにリハビリに励みました。結果、五十日足らずで、退院することができた。

家に帰っても、歩くように努力した。ある時は家族の反対を押し切って、ぶらぶらした手でスコップを握った。畑仕事をするように努めた。ひっくり返って、泥んこになったことも何度もありました。そうこうしているうちに、足が地につくようになり、手もしっかりしてきました。わずか十ヵ月ほどで畑仕事だけでは物足りなくなりました。

生きがいを求めて仕事をと歩いたが、障害を持つ私に合う職は見つからず、それでも諦めずにいた時、病院で出会った友人から、人材センターのことを聞き、入会させてもらいました。

今日この頃では、人とのコミュニケーションもでき、働きながらリハビリにもなるし、毎日を感謝しながら元気に頑張っています。ありがとうございました。

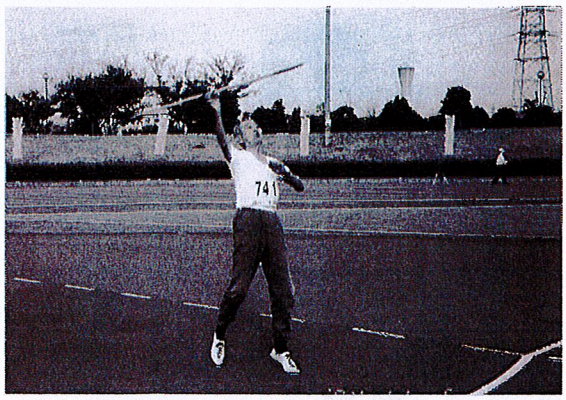
## マスターズ陸上競技に参加して

十三班　滝川　正道

健康づくりの一方策として、生涯スポーツを考慮中のところ、当シルバー人材センター会員中に、スポーツ熱心な三宅輝男氏が居られ、同氏の推薦をいただき六年七月一日大阪マスターズ陸上競技連盟に加入させて頂きました。

さて十一月五日・六日大阪府主催にてスポーツレクリエーション・フェスティバルが堺市で開催、その一環としてマスターズ陸上競技も含み開催されることを承知しました。

早速と出場を決意して8／1申込場所の豊中市教育委員会体育振興課を訪問の上、八十歳以上クラスが無いため七十歳以上クラスの



大阪府下で只一人81歳で参加、1位獲得！

やり投、砲丸投、円盤投の三種目に出場申込みを致しました。

私のスポーツ歴を申しますと昭和四・五年と旧中学校硬式野球の大阪府予選に二年連続出場して居りますが、陸上競技は普通の中学生並みです。但し野球ボールの遠投力をつけるため、やり、砲丸、円盤投を練習した程度です。

今回の参加は実に六十四年振りですから、少しは練習しておきたいと考え各所に申込みましたが、個人では危険防止できないため、どこも器材借用が出来ず、唯一万博公園競技場のみ砲丸投げ練習の機会を与えて頂きました。

いよいよ本番の十一月五日㊗は晴れ、六日㊐は夜来の雨が終日止まず、最悪のコンデションでした。

マスターズは35歳以上5歳きざみでクラスが男女別にあり、陸上競技一般と、今回は小学生男女別の400mリレーが有ります。投てき競技器材は若年層は重く、老齢層へ順次、軽量となります。両日共老若男女（小学生も含み）全員元気ハツラツ、持てる力を十二分に発揮して、楽しく、さわやかに汗を流して居られました。

堺市金岡公園陸上競技場に、胸にゼッケン番号を付けて立って見ますと、正に闘志満満頑張るぞの意気が、老令ながら湧き上って来ます。70歳以上のクラスの参加者は三種目とも申込者は私一人でした。誠に競う相手なく、残念至極です。81歳の私が三種目共一位の賞状を頂きました。（金メダル三個だと感激ですがね）次に記録を記します。

| 70歳以上クラス | 器材 | 私の記録 | 成績 |
|---|---|---|---|
| 一、砲丸投 | （4kg） | 四m八五 | 一位 |
| 一、やり投 | （600g） | 一〇m九八 | 一位 |
| 一、円盤投 | （1kg） | 一一m八〇 | 一位 |

おわりに、大阪府下広しといえど、81歳で参加、且つ一位を獲得できたことを誠に名誉だと考えます。来年は大いに記録に挑戦し、健康保持と長寿に努力いたします。皆様有難う。

砲丸投げ　傘寿の腕に　秋の雨
エイヤァと　槍を投げるや　天高し

## 六十五歳の手習いです

十四班
錦野　富雄

遠い昔の小学生の頃でした。その当時習字と言いましたか、書き方でしたかの時間中、紙に書かずに手や顔を汚していたお陰げで、社会に出てからは毛筆となると手がすくんでその度に人に頼んだものです。どうしても、自分自身で書く結婚式の記帳などの時は、全く困ってしまい、はずかしい思いをしたものでした。

せめて自分の姓名ぐらいはそこそこの字で書けたらなあ、そして少しましになったら老後の余暇の楽しみに「書」をしてみたいと思っていました時、シルバーの「事務局だより」第94号で「書道同好会」の有る事を知り、早速お願いし入会させてもらいました。

それから一年私自身が自分でもびっくりしていますが、最近ちょっとましやなあと思える字が少し書けるようになって来ました。

毎月2回センターの和室で学習する時の雰囲気のとても良い事、その中で私は毛筆で字を書くのに必要な数数の事をおしえてもらいました。お手本などの立派な字はみがき抜かれた線で、書かれておりますが、その一つの線を書くのにも、運筆の速いところと遅いところが有り、又起筆と収筆と転折などは入念にゆっくりと、此の運筆のリズムなど実に色色の御指導を頂きました岩村会長のお陰で、私でも、時にはうまく書く事が出来て、その時は大変うれしいものです。

又いつも共に学び何かと励ましをもらいました。会員の皆皆様もすべて私の師であったと思ってお

り大変感謝しております。

それから3月11日の「毛筆筆耕講習会」で宮崎先生がお仰った、「皆さん、なんでそんなにいそいで速く書くのですか、字と言うものはもっとゆっくり丁寧に書く様に」とのお言葉が筆を持った心に思い出されて居ります。

おかげ様で、私のこれからの趣味と言いますか、楽しみとして愛好するものが出来大変喜んで居ります。有難う御在居ました。

秋晴や　しぶきを浴びて　川下り
山道の　あけび取り合う　ハイキング

## 忘れられない言葉…

四班　江藤　翠

テレビドラマを見たり、本を読んだりして、それが一年間の大河ドラマであったり、またぶ厚い本であったりするが、その中に心に焼き付いて忘れられない言葉が一つでもあったら、それを見続け、読破してよかったと思っている。

以前、「あしたこそ」という朝のドラマの中で、将来の方向が定まらず、今の仕事に満足できなくて悶悶と日を送っている娘に、父親が「今していることに無駄なことは一つも無い。一生懸命すればそれはきっと将来の役に立つものだ」と諭していた。忘れられない言葉だ。

最近のドラマ「ええにょぼ」の中で、末っ子がプロの将棋士になりたいと言うのを家族は賛成しかねているが、父親は許すという話があった。肝臓癌で、もう死の床にある父親は母親の「あれが志を遂げられずに帰って来ても、受け入れてやってくれるか？」と言う。

これだ！他人は、それみたことかと言うかも知れないが、その傷心を黙って受け入れてやるのが親なのだ。親でなくても、傷心の人にはおしなべて胸を拡げ、黙って包んであげよう。それが人間愛だと思う。

もう一つ、本を読んでいて「愛は与えられるものではない。与えるものである」という言葉に出会った。これこそ一生忘れられない言葉である。これを言ったのは、キリスト者であるが、そうでなくても総ての人についてのことであると思う。

まだまだたくさんあるが、私はドラマを見ていても、本を読んでいても、ハッとする言葉に出会うと感動し、一つ一つ自分のこやしにさせてもらっている。それで、これぞと思うものは一生懸命見、読むことにしている。

## 勇気ある臆病者に

十班　朝倉　幸子

錦秋も、枯葉舞うきびしい季節を孕んで、少しづつ様相を変えつつある。年配者にとって一番難儀なのは冬の季節であろう。

私は血圧が高い方なので暖い屋内から外出する時は私は臆病なまでに気を使う。今から寒い外気にあたるのだという事をキチンと念頭におき、身繕いを点検して外出する事にしている。また入浴の時は温度差のないよう脱衣場をストーブで暖めて置く事を忘れない。といっても、寒い所へ出る事をおそれては居ない。保護する事も鍛練する事も同じく大切と思って居る。

精神的にも他者に傷つけられる事に神経質であるが、昔から日日薬といって、月日と共にうすらいでゆくものではあるが、傷口は治っても傷跡は長く残るものである。相手を大切に思う心があれば、自分の意見は、はっきりいっても、大きく相手を傷つけずに済むものである。その人の人間的境涯であると思えてならない。

日本語はさまざまな表現、語意があって奥深く、言語の妙を駆使出来ればと思う事、しばしばである。昔の賢聖の言に、賛められればその人のために命もいらず、謗られれば、後難の事も考えず飛びかかって一矢を報いたいと思うものであるとの教えがある。まことに人情の機微をとらえた言である。

私もとびかかりたい性分ではあるが、年を重ね、「気の毒な人だ、私も気をつけよう」と思う事にしている。これは自分との葛藤に勝つ勇気であるといえば大げさであろうか、時時ズッコケて負ける事もあるが、自分に負けて相手に勝つのは後味の悪いものである。

この二年ほどシルバーの短歌同好会に参加し、少しづつふくよかな自分を構築しつつあるのは、しみじみとした歓びである。無関心であった四季の花花、植物に繊細な眼差しをむけられる様になり、コンクリートの小さな割れ目からもたくましく生きる雑草の小さな花、巨大な岩の下に根を持つ松の木、どうしてこんなところから生い繁る事が出来るのか、その生のけなげさと切なさに感激し、肥沃な大地に思うさま根を張る事も出来た松の木もあらうに、樹木の宿命のようなものを思い、人生も環境ではないと希望と勇気をひたひたと感ずる一瞬もある。環境を悲しんだり責めたりする事なく、楽天的強気と細やかな知恵を生かした毎日をめざしつつあるのが、私の勇気ある臆病者ということである。一度しかない人生をのびのびと、こだわらず、しみじみと過したいと思う昨今である。

# 天豊山荘の無農薬野菜と無人鶏放牧場

十三班 原田 天豊

鶏を飼育して安全なおいしい卵を食べたいと家内が言いだした。だれも居ない無人の山荘で果して鶏を飼うことが出来るかという不安があったが、ものは試しに白色レグホン2羽、チャボ夫婦と4羽を近くの農家で買い2坪の小屋を建て、昼間は放し飼いにした。

豊中に帰っても不安で鶏の話題ばかり。6日ぶりに山荘に行き、真っ先に鶏小屋へ。生きている。卵も産んでいる。2日間畑に放し飼い、その内にこまった事が起きた。チャボの雄とレグホンが仲よくなりシットしたチャボ雌が家出してしまい帰って来ない。一ヵ月位たって、ふと気がつくと、かきの木の上にチャボが止まっている。近づいても逃ない。つかまえてみると、やせてがらがら。小屋に入れてもえさを食べる元気も無い。ねりえさをつくって口に入れて食べさせた。チャボ夫婦だけの部屋をつくった。

5月農協に外国産のヒヨコを1羽800円で30羽を注文、ヒヨコは集まって寝るので下じきで5羽、えさの食べすぎで6羽死亡。更に小屋のすき間からイタチが入るし床下を掘ってタヌキ・キツネが侵入して16羽が取られる始末。新しい小屋を建てて6月に50羽を買う。こんどは成功。全部元気に育ったが畑に放すと野菜を全部食べ、ついでに隣の畑に出向く、仕方なく全網の放牧場の小屋をつくった。えさ場・寝室・遊び場・巣箱・次ぎ次ぎと建て増した。始めの内は箱の中に卵を次ぎ次ぎと産みたすので、割れたり腐るのも出来るので、産室と卵部屋を分けることで解決。1週間のえさを一度にもらうので食べすぎて死ぬのもおる。

ヒナが入ると雄鶏を入れて指導することで解決。雌ではツツいていじめるので駄目。自家で産まれたひなは親が飛ぶことを教えるが買ったひなは飛ぶこと出来ない。試しに羽根を広げて空へ放すとドスンと落ちる。翌年50羽、自家生産20羽、常時100羽の鶏を飼育して居るが卵を産まなくなったのは肉にして会員に配る。えさはトーモロコシ・麦・米ぬか・魚粉・かきがら・野菜など、炊いて練りえさを作り与えている。今年はナンキン500kg、じゃがいも400kgを食べてしまった。タヌキ・キツネが近づくと大きな声で警戒の合図をします。今までにイタチ4匹タヌキ1匹捕獲、毛皮にしてあります。

鶏の世界にも、いじめがあります。各部屋に必ずいじめられが出来ますので、部屋の仕切りを解放して大部屋にしていますが、雄のボス争いもすさまじいものですが、すぐ自分の縄張りが決ります。いじめられは背中の毛が抜かれているので、すぐわかりますし、止り木の上から降りれません。えさを食べに下へ降りて来ると皆で追い掛け回して食べさせません。いじめられに気がついて小部屋に入れてもえさをたべず餓死します。大

部屋には次のいじめられが出来ております。

チャボを使って自家生産の鶏を毎年育てて改良しておりますが、大きな卵を産むのが出来ており、チャボの部屋に金鶏鳥の雄を入れて更に、う骨鶏も卵を抱いており現在3羽のヒナが居ます。

健康の為に始めた無農薬の野菜と、産みたてのおいしい卵や赤身のカシワ肉をたっぷり食べてシルバー天国に向かって前進前進！

## 健康への足がかり

六班　竹端　久雄

四十有余年の会社生活も、定年退職と言う一つの区切を以って、今年で十年がたち、古希を迎えることとなった。戦前は人生僅か五十年の時代からみれば、二十年も生きのびたことは、喜ぶべきかどうか複雑な心境である。最近の新聞、テレビの情報で百歳以上の方が五千人も国内におられるとのこと、私にはとてもまねのできない、自信がもてない話であると思っている。さて、昭和六十年の春に先輩の紹介でセンターへ会員登録をした。在職中は好むと好まざるに拘わらず、組織の一員であれば拘束や束縛は止むを得ないものであっただけに、退職後、心身共に抑圧されていたものが一度に開放され、安堵感からか、朝寝朝酒朝湯、といかないまでも、ワンカップを友にテレビの番をするのが毎日の日課で、数ヵ月も続いた。と或日のこと、先輩が「毎日どないしているねん」と声がかかり、以上の事を話し「ぶらぶらしてんねん」と言うことから「そんなことしてたらあかんで、体に悪いで」と脅されて、素直に反省し、センターへと足を運んだのが実状で動機となった。

現在、仕事も順調に消化させて頂いています。また二年程前からセンター内でハイキング同好会が発足され、会員の一員となり毎月参加させてもらっています。多数の会員さんと一緒に参加して会員相互の親睦と友好を深める機会が健康にもつながることがなによりです。会員さんと知り合いとなったことが、私の人生でもっとも有意義であったと思われる今日この頃です。これからも、人と人との出会いを大切に、そしてもっと積極的に求めていかなければと、痛切に感じます。これから自分の体は自分で守り、健康で明るい生活が一日でも永くできることを願いながら、皆さんと一緒に頑張っていきたいと思っています。

## 秋の日に

五班　藤本　哲夫

仏像の見方を教わった。記憶の消えない中に実物を見ようと思い、高野山、比叡山に遊んだ。共に十月半ばの涼風の通る澄み切った秋空の良き日であった。

先ず高野山大塔、金堂を訪ねた。御本尊はそれぞれ胎蔵界大日如来像、及び薬師如来像であった。早速、教わったメモを開いて見比べて見ると、成程その通りの御姿に、ひそかに微笑さえこみあげて来た。印相、光背、台座、天蓋等々、メモの文字と実物を繰返し見ながら、仏像の性格や尊名を知る、貴重な一時であった。今迄に何度も仏像は見て居るが、はずかしながら、此の様な見方をしたのは初めてで、御堂の前に佇む時間の長さに吾ながら驚いた次第です。

次に比叡山大講堂、根本中堂、文殊楼を訪ねた。大講堂の大日如来像、根本中堂の薬師如来像、先ず手の印相に注目した。此また教わった通りの手の掌、指の形の御姿に一抹の興奮を覚えた。文殊楼の文殊菩薩像も獅子の上に居られた。普賢菩薩像は、象の上に居られるらしいが、何時かお目に掛かれるものと楽しみにして居る。

仏像の世界、文字、読方等々、難しい分野であるが、此れを機会に、私なりに新しい観点から、訪ねて見たいと思って居る。

# 楽しかったバスツアー

## 保津川下りと京都一、漬物「西利」見学

六班
竹端　久雄

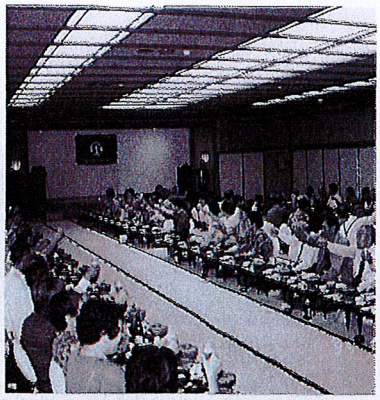
恒例のバスツアーも、秋の好天に恵まれバス3台が定刻にスタートした。市内を通り一路車は摂丹街道を亀岡へと進んで行く。野こえ山こえ、やがて車は予定通り保津川下り乗船場に到着する。

Vサインもなごやかに皆笑顔

本日のツアーのメーンエベントの保津川下りが開始される。各自が号車毎に乗船する。最初は緩やかな川の流れに船頭さんの力いっぱいの櫓さばきは、大変な労働であるなと思った。船はやがて急流や岩場の間隙をあざやかに水飛沫を上げながら、ドンドンと進んで行く。両岸の山山の景色を眺めながら、紅葉には程遠い感じであったが、何度来てもメンバーが変わり、気節が変われば又違った趣が感じられた。一時間五十分位で終着の嵐山に、スリルと感動を私なりに充分堪能しながら下船できた。

昼食時刻を若干オーバーして食事会場の渡月亭に入った。桂川の川面に位置する会場で京会席料理に舌鼓を打ち申し分のない心遣いに感謝して美味しく頂いた。宴も酣わ、進行係の伊藤さんの引きまわしに便乗してカラオケまで悪のりさせてもらった事も嬉しく思っております。食事も終り次の会場へとバスに乗り、京都一の、つけもの老舗「西利」さんへと足を運ぶ。店内ではお姉さんの製造工程の説明など聞き、つけものの試食とワインの試飲で接待され有難く頂いた。「たかがつけもの、されどつけもの」の感があり、おみやげにと三つ程買い込んだ。店内の割にトイレの少ないのは如何なものか？会員さんがそれぞれのおみやげものを車の棚に、またトランクの中にもいっぱいになり、本日のツアー全行程を終了し帰路についた。

「西利」の漬物おみやげに


桂川河畔の渡月亭で全員昼食乾杯！

京都南インターより名神高速を豊中までバスは突走る。車中では会員さん始め職員の皆さん、特に水田嬢のノド自慢によるカラオケは最高で車中は盛り上った。カラオケのボルテージが最高潮に達した時バスは市役所前に無事到着した。毎回のツアーでセンター職員の皆さんによる計画、実施、検討に亘り大変なお世話に感謝の気持でいっぱいです。又、日頃会員の皆さんの顔見知りのない方とのコミュニケーションがこのような機会にできた事も合せて元気で、すごせる毎日に感謝しております。

次回も楽しいバスツアーに参加できることを願いながら明日に向って頑張ろうと思います。有難とうございました。

# 同好会だより

ハイキング／短歌／俳句

## ハイキング同好会

### 箕面の秋を求めて

K・K

十一月十二日、お天気は上上、箕面駅9時集合。少し早く来すぎたかなと思いながら駅を出る。見回すといつもの人達が二～三人来てらっしゃる。ベンチに坐って待っていると、来るわ来るわ四十二人も集っちゃった。出発――

滝までの道は土曜日の故か大変な人出。紅葉も見頃でとてもきれい。今日は頑張って前の方を歩き続けようと思う。滝口あたりまでは前の方の集団に入って歩き続ける。愈愈山登りが始まる。最初のうちは、ついて歩けたけれど、ボツボツ限界。木の根を見つけては坐り、階段になると坐り込む。どうにも足が進まなくなる。お付き会いして見守ってくださる方にほんとうに申し訳ないと思う。やっと昼食場所のビジターセンターに着く。お部屋へ入らないで、外のベンチで昼食をとる。緑の木木に囲まれて息をするたび胸の中が洗われるような気がする。ゆっくり休んだ故か元気が出て来たようである。

お昼から少し登ってダムを見に行く。広い視界の中、ダムの水の青色が美しい。また少し歩いた所から見た向いの山のきれいだったこと。見事な綾錦、「わあ、きれい」「ほんとうにきれいだ」と皆で暫らく見とれていた。

下りになると現金なもので意気揚揚、皆とワイワイおしゃべりしながら歩く。途中男の方が、むかごを取って「これ御飯に炊くといいよ」と教えてくださる。「わあ楽しみが出来た」と有難く頂く。やっと昆虫館の所へ出る。疲れたけれど楽しい一日でした。

後日、むかご御飯を賞味、なかなか乙な味でございました。

総勢42人で…箕面のお山も紅葉が見頃でした

# 短歌同好会

人麿呂の歌碑ある道を歩みきて
　秋草繁く妻の手をとる
山栗の毬剝しつゝ待つバスは
　気付かぬ吾を残し去りゆく

芝田　健一

紫蘇の穂の紫淡く匂いたち
　風化されゆく夏の追憶
宝物のように幼の手に載する
　蟬のぬけ殻陽のぬくみ持つ

小原すゑ子

二年坂手焼のかき餅醤油の香
　若者並びて買うぞ楽しき
拙くも暖かきもの伝わると
　わが俳画見て友が勵ます

滝川　正道

尊敬の心あらねどあでやかな
　菩薩を恋いて登廊ゆく
年重ね他者賛ことの幸を知る
　嫉の炎の盛なる敗者みて

朝倉　幸子

古き恋新しき恋散り果てぬ
　初老の吾に秋の風吹く
安らぎて老いゆく吾を望みしに
　耐え難き試練次々に待つ

中山　和久

天高く海原青き都井岬
　野生の馬に潮風ぞ吹く
秋の風爽かに通る中仙道
　筧の水の音すき通る

藤本　哲夫

何時の日か永劫の寂まりあるものと
　整理のひと日旅立ちのごと
生け垣の木槿の花も咲きましぬ
　そをこまやかに渡る秋風

戸牧　静子

今別れ来し短歌の友木犀のうた
　創作らんと晩食とらずに
もみじ葉の影を写して行く水の
　指に冷たき有馬の山路

江藤　翠

なんと無く人恋ふ心夕闇に
　ひそとなまめく木蓮の花
山柿の鈴なり赤く秋更けて
　没り陽も早く里は暮れゆく

本多　兼重

# 俳句同好会

## お誘いします

藤本　哲夫

私達俳句同好会は、発足以来早や二年を過ぎました。散漫になり勝ちな、第二の人生を少しでも楽しく、有意義に送る為め、自然を相手の気楽な、集りを続けて居ります。

歩道をころがる落葉にも美を感じ、四季折折の花や、おぼろな月の光に感動し、生きる証を五、七、五の調べに乗せて、喜びを見いだして居ります。

シルバー会員の皆様方も、老化防止の為にお気軽に、ご参加下さるよう心からお待ち致しております。

## 俳句雑詠

書に飽きて無月の空を仰ぎけり
秋灯下傘寿記念の句集編む

滝川　正道　　本多　兼重

やっと出た待宵月にうろこ雲
唐辛子赤きが映えて空青し

中山　和久

待ちかねた祭囃子に風立ちて
憂き事を月に捧げて祭り酒

小原すゑ子

逝く人をとどむ術なし鰯雲
死はつねに片道切符つばめ去る

朝倉　幸子

万象も疲れ果てたる長月や
冴えし名月雲追いかくも稟として

藤本　哲夫

秋風や旅籠の里の水車
陵の丘に安んじ残る虫

## 大台ヶ原ハイキングにて詠める

小深　静香

バス車窓より
朝の陽に　休耕田の　秋桜
　みのりのときを如何に見つらむ

雲走る　空を見やりて　大台の
　景色如何にと　たゞに思ほゆ

大蛇嵜にて
空と渓谷とあわいに在りて大蛇嵜
　霧の時間に　錦をぞ見る

正木ヶ原にて
立ち枯れし　トウヒ林を仰ぎ見て
　この世の末の　無惨を思う

幾とせを　打ち伏し居りし倒木に
　若苔生いて　緑うるわし

ラジオの俳句教室を聞いていまして、センターのニュース紙へ投稿を思いつきました。愚作ですが

蝶々が植木に遊び鈬置く
この夏を頑張り抜いて秋をまつ
夕風につばめも舞って空青し
夕立や足が地つかず軒の下
水不足うどん作るが　汁できず

速水　冨造

# 取材活動

シルバー同志で何でも聞いたり話したり

## とっておきの話

### 健康維持と決断力の養成はゲートボールにあり

豊中ゲートボール連合70チームのなかでも各地大会で10数回優勝の実績をもつ強剛「箕輪むつみ会」を久保公園に訪ねた。朝8時から2時間、雨の日と日曜日以外は毎日練習、皆さん元気いっぱいで平均年齢70歳とは見えないはつらつとした選手ばかり。ルールを完全にマスターし練習で鍛える。どんなゲーム・スポーツでも言えることだがと辻会長が話してくれた。

500平方mのコートでのんびりと楽しんでいるように見えたが、実は大変なゲームで、身体こそ活発に動かさないが精神を統一し頭の回転を早め、決断してボールを打たないと時間10秒は直ぐに過ぎて失格となる厳しいものだ。筆者もステックを借り試し打ちをしたが球の方が言うことを聞いてくれない。さてここで当シルバ人材センターの宮崎理事1級審判員（国際競技審判）にお聞きしたゲートボールの概略を説明すると、スティック（柄の長い木槌）でボールを打ち、1、2、3のゲートを通過させ、ゴールポールに当てるもので、自チームのボールを有利に、他チームのボールを不利な位置に進める思考の要するゲームだ。昭和22年鈴木栄治氏が考案し48年〝ゲートボール〟と命名された。

現在、韓国をはじめ中国、アメリカ、ブラジルなど世界10余ヵ国で競技が行なわれ、国際試合もはなばなしく開催されている。我が国でも約200万人の愛好者がいて益益発展している。豊中市内では南、中、東、北の四ブロック、70チームがあり親善試合も各地で行なわれている。

ところで異色のチームを紹介しよう。蛍池延寿会の皆さんで、会員13人うち半数が明治生れ、最長老の山岨（ヤマソバ）さんは89歳、身体の調子がおかしいと感じた時は2時間の練習で気分は爽快、すきっとするそうです。正座が出来ず困っていたが練習を続ける内にいつの間にか直ってしまった経験を持っている選手もいる。とにかく勝敗にこだわらずチーム一丸となって健康維持に励んでいる。

取材……金子　勝蔵

会員13人の半数が元気な明治生れの「蛍池延寿会」練習風景

「箕輪むつみ会」兵庫県山東町での競技会で優勝

頑張っています。元気です。とご本人やご家族の「とっておきの話」がございましたら、シルバーセンターまでご連絡ください。

## コラム

### 「漢字が日本に将来される以前に日本固有の古代文字は存在したか」（その2）

さて、[ホツマツタエ]にはどんな内容が記されていたのでしょうか。主なものを列挙してみますと、

一、[高天の原]は天上と地上にあった。

二、干支以前に日本には超古代暦があった。

三、ひな祭りは婚礼の儀式制定に由縁がある。

四、[たかむすび]は日高見と天界を結ぶ神の役職名。

五、天照大神は元来男神で十二人の后があった。

六、産医術が古代医術が説かれている[和方処]と云える。

七、古代新治宮の建築法が説かれている。

八、神武天皇東征の理由。

九、古代馬術の奥義。

十、古代機織りの伝承。

十一、葵祭りの起源。

さて、日本列島における古代の宗教と信仰について、大和岩男氏の説を基に看てみたいと思います。

日本列島には何万年もの往古から、北はアリュウーシャン列島、カムチャッカ半島を経て南はポリネシア地域から、はたまた、ユウーラシヤ、中国大陸、朝鮮半島を経て、幾多の異民族が集団、あるいは、単体で営々と渡り住み、先住日本民族を形成していったものと考えられます。そうした日本古代にあっては、祖霊崇拝、自然神崇拝のもと子孫繁栄、五穀豊穣祈願が祭祀の中心であり、やがて、稲作、農耕文化の到来とともに、農業神崇拝が支配的となり、支配者は同時に司祭者の性格をもつようになり、祭政一致の方向が強められていったと云われています。特に日本の古代祭祀の源は、太陽神信仰が大きな基となっていたものと思います。

太陽は凡ゆる命の源として、豊穣祈願とともに子孫繁栄の據であった訳で、世界の年中行事の中でも12月の冬至が大きな祭りとなっている国は至る処にあります。冬至は太陽の光が最も弱くなり、そして夜が明けると、次第に日一日と力強さを増して行く。天照大神が太陽神として祀られている聖處は冬至の太陽の光が射し込む御坐(みくら)にしつらえています。冬至と夏至に子孫繁栄・豊穣祈願の祭祀が盛んに行われています。

天の岩戸かくれの神話にみられるように、岩屋とか岩窟と言うのは、母胎とみなされ、そこでは日の神と日の妻(め)との合体がなされるとの信仰があり、日の光によって、子を宿すという神話も世界の至るところに見られます。冬至は陽の神が、再生する日であると信じられていた訳です。天皇家の祖先神としての天照大神を奉祀する神道、すなわち[ホツマツタエ]に述べられている[天成る神道]が、徐々にその信仰の対象となって、古神道と相縄って、日本古代社会に確立されていったものと看られます。

三―四世紀には、日本列島に大量の渡来人が、中国及び朝鮮半島から渡来し、それに伴って当初、日本古神道の主流を占めていた新羅系神道は、易、五行思想、道教の影響を受け、日本神道の多様化が進んで行くことになります。

そして、五世紀に入ると、朝鮮半島の政変（百済の滅亡）の煽りをうけて、百済系の有力渡来人が、多数、日本列島に渡来し、祭祀を司っていた物部氏などの新羅派勢力に対抗するものとなって行き、そして、五三八年仏教が将来されると、崇仏派の蘇我氏と神道派の物部氏の対立抗争を惹起することになる。次第に、百済系崇仏派渡来人の勢力が中央政権を牛耳る程の勢力を有するに至り、587年、蘇我馬子は厩戸皇子（聖徳太子）と共に物部守屋を河内の渋河に囲み射殺する。これは、単に宗教上の対立ではなく、神道派である新羅系渡来人勢力と仏教派の百済系渡来人勢力との主導権争いであった訳で、仏教派の隆盛と神道派の衰退をもたらすことになる。

かかる状況にあって、元来[天成る神道]として、[政治](まつりごと)の支配者哲学の基本教義として、権威を以て用いられていた[ホツマツタエ]は、仏教に国家宗教としての地位を奪われ、以前にもまして秘匿され、独占的且特異な特権的奥義として、禰宜、神官など、特定の家系に子々孫々家宝として、秘伝されていった日本古神道の奥義書であったと考えられるのです。

では、[公にされ得なかった理由、秘匿された理由]は何なのでしょうか。いくつか上げられています。

その理由の一つとして、藤原一

族の陰謀であったとする説があります。

即ち、大化改新後、孝徳天皇により中臣鎌子連は内臣に任じられ、大織の冠を授けられていたが、唐人の沙門旻法師や高向玄理ら国博士の指導による行政改革が進められており、百済に代って、新羅風（唐風）への移行が進められる中で、中臣鎌足は韓半島からの分離独立の道を探る時期が到来したとの判断から、独自の歴史書の編纂をするに当たって、天皇家と藤原家との関係の絶対化確立の為、稗田阿礼が暗誦した内容を大安麻呂に筆録せしめたのは全て、潤色もしくは虚構物語りの作成であるとする林青梧氏の説がある。

次ぎは、継体天皇の［焚書刑語］説で、継体天皇より以上の皇位継承の有力者の存在が記されていたであろう数多の古い記録、伝承の類いがあった筈であるのに、武烈天皇から継体天皇間の［系図］記載、もしくは［若干の説話］記載の行われた［諸記録］の大部分が廃棄されたのではないかと云われている。即ち、［古事記］の序文には唐の太宗(626-649)の命により孔穎達等が詔を奉じ撰したと云う五教正義、百二十三巻の中の、尚書正義の序文を牽いたと做される箇所があり、単に修辞上、利用したと云うに止まらずストーリーそのものを対比させている［古事記］成立の経緯について、［五教正義］では秦始皇帝の焚書坑儒と編纂の所以を明記しているのに反し、［古事記］ではこの特筆大書部分がカットされていると古田武彦氏は指摘されている。

第三には、聖徳太子と蘇我馬子の陰謀説がある。

推古天皇が女帝第一号として即位するに際して、朝廷内外に予想される強い抵抗をさけるためにも、又、非常な衝撃を避けるためにも、何か、合理的な支柱を得んとし、天皇紀、国紀の編纂に当たり、［ホツマツタエ］では、天照大神は男神であったのを、聖徳太子と蘇我馬子が作為し、［日本書紀］では女神に仕立てると云うことが、唯、二ヵ所を改竄することによってなされたと松本善之助氏は指摘されている。

第四に旧事紀、古事記、日本書紀は蘇我氏専横時代に、聖徳太子、蘇我馬子、秦河勝など蘇我一族が国権簒奪の野望を遂げんがため、正統なる天皇家とその系譜、由緒、精神を明記した［ホツマツタエ］を危険書として排除し、制定した国定ならぬ謂わば、閥族定の史書であるとされる馬野周二氏の説がある。

更に、弓削道鏡による［記紀］改竄と［ホツマツタエ］焼却説が鳥居礼氏により出されている。

即ち、天照大神は初め男神であったが、第46代、女帝、孝謙天皇は御子がなく、親王の子を以て嫡子としたのだが、道鏡は天皇に重く用いられると、自分の子を皇位に着けようと目論んだ。そこで、新帝淳仁天皇を流遷し［日本書紀］の剣玉の誓いの段を女神天照大神と素戔嗚尊（すさのおのみこと）が密通し、子を成したかのごとく改竄したと云うのである。更に［記紀］を改竄した道鏡はそれを天下に流布せしめんと、その障害となる古書を悉く焼失しようとしたと云う。それを嘆いた大加茂臣赤坂彦なる人物は女帝に何度も諫言したが、帝はそれをお聞き入れにならず、赤坂彦は和仁にて自刃してしまう。この赤坂彦が［ホツマツタエ］の伝承者であると伝えられている。

尚、奈良県天理市槐本町大字和爾小字北垣内（かいと）には和爾坐赤坂彦神社が現存する由。同書によれば、赤阪彦は［ホツマツタエ］の消滅を虞れ、子の世々彦にそれを託し、近江の和爾村に隠棲せしめ、この地に［ホツマツタエ］が秘伝の書として伝え続けられたと述べられている。

岡本　宗五男
（編集委員）

### あとがき

気候不順な昨今、会員の皆様には、おすこやかに新年を迎えられましたことを、お慶び申し上げます。

本号は特に編集委員岡本氏の「会員の主張」第一席入選作発表と多数の会員方の投稿による「会員のひろば」で紙面を飾ることができました。引続き皆様のご投稿をお待ちします。

※表紙写真は藤田理事、「賀春」は岩村会員、人物カットは豊中市人権文化部の中村徹夫様にご協力いただきました。（編集委員一同）